

オペレッタの名人たちが舞台狭しとくり広げる、男と女の危ない? 恋の物語。
オペレッタの殿堂ウィーン・フォルクスオーパー6年ぶりの日本公演。
オペレッタの代表作「こうもり」を話題のびわ湖ホールで上演!

KING of OPERETTA

ウィーン・フォルクスオーパー

ウィーン・フォルクスオーパー管弦楽団・合唱団・バレエ団

エリーザベト・カーレス／ビルギット・シュタインベルガー／アドルフ・ダラボッツァ／マルクス・ヴェルバ
ミヒャエル・クルツ／ヨーゼフ・ルフテンシュタイナー／ヘルムート・ヴァルナー／ルドルフ・ヴァッサーロフ／ヨーゼフ・フォルストナー
演出:ロベルト・ヘルツル 指揮:アッシャー・フィッシュ 舞台美術:パンテリス・デシーラス

日本語字幕付



A. フィッシュ



E. カーレス



B. シュタインベルガー



A. ダラボッツァ



M. ヴェルバ



M. クルツ



J. ルフテンシュタイナー



H. ヴァルナー



R. ヴァッサーロフ



J. フォルストナー

1999年6月19日(土)

午後6時30分開演

びわ湖ホール

料金(消費税込) S¥28,000 A¥24,000 B¥20,000
C¥15,000 D¥10,000 E¥6,000

主催=朝日放送、(財)びわ湖ホール、ジャパン・アーツ

1999年2月14日(日)発売!!

ご予約・お問合わせ

ザ・シンフォニーホール予約センター

06(6453)6000

〒531-8501 大阪市北区大淀南2丁目

前売場所●ザ・シンフォニーホール 06(6453)6000

びわ湖ホール 077(523)7136

アスクPG 06(6222)1145 / 阪急プレイガイド(三番街) 06(6373)5446

チケット・セゾン 06(6232)9090 / チケットぴあ 06(6363)9999

ローソンチケット 06(6387)1772 / CNプレイガイド 06(6776)1188

まさに泣き面に蜂!

昔のいたずらの仕返しをされた上に、浮気もバレてさあ大変!!

ヨハン
シュトラウスⅡ

こうもり

ワルツ王
ヨハン・シュトラウスⅡ
没後100年記念公演

全3幕

Johann Strauss II DIE FLEDERMAUS

VOLKSOPER WIEN

待ち遠しい“夢をつむぐ劇場”の6年ぶりの来日

待望久しいオペレッタの殿堂、今年100年祭を迎えるウィーン・フォルクスオーパーが、6年振りに1999年6月、日本にやってくる。

ウィーンでは“ジャンバン・オペレッタ・チクルズ”と称んでいるJ.シュトラウスの『こうもり』、F.レハールの『メリー・ウィドウ』、E.カールマンの『チャールダーシュの女王』を持って、総勢250名の引越し公演だ。

今は20世紀末、この3つの不朽の名作が生まれたのも1世紀前の世紀末。『こうもり』が1874年、世紀末といっても遅れてきた20世紀初頭のウィーンの世紀末に比べ、不倫も浮気もまだまだ明るく陽気で健康的だ。1905年の『メリー・ウィドウ』は、爛熟したハプスブルク王朝文化は既に病み、ワルツ王の骨太なメロディの美しさは、レハールでは憂愁を秘め、甘美で、不健康で、人工的で、膾炙して人の心にせつなくやるせなく訴える。そして1915年、第一次大戦勃発前後の『チャールダーシュの女王』には、レハールの“黄昏の憂愁”さは消え、ワルツ王のあの春のような活力とも違う、ウィーンの秋の黄一色の輝きにも似た活力が再び蘇っている。

オペレッタは時代を、社会を映す鏡。この時代を過ぎたウィーンっ子は、オペレッタをこよなく愛した。それは世紀末の不安の時代に、オペレッタを見れば、理屈抜きに楽しくて、面白くて、舞台と客席が一体となり、どんなに疲れていても、見ればたちまち元気になる“元気印”の活力剤だからだ。それもその筈、オペレッタはどんなめごとが起こってもいつもハッピー・エンド。オペレッタに出て

くる人間たちは、ハッピー・エンドを求めてあらゆる知恵とエネルギーを使う。その熱いエネルギーを見ていると、いつのまにか自分も登場人物と同じ気持ちになって、なぜか元気が、勇気が湧いてきて、ハッピーな夢をつむがせてくれる。

世紀末ニッポンは今やオペレッタ天国になった。1世紀前のウィーンのようにこの所、急速に“オペレッタ大好き人間”が、熟年の大人はもちろん、素敵な“大人のソサエティ”に憧れる若者が増えて来た。その証拠に続々と海外からオペレッタが来日し、不況知らずの入りを続けている。1世紀遅れてやってきた日本のオペレッタ・ブーム。

反対にオペレッタのメッカ、ウィーンでは1994年前後、オペラやミュージカルに押され、オペレッタは“冬の時代”だった。オペレッタを愛してやまないフォルクスオーパーのスタッフや歌手は、おそらく思案投首、切齒扼腕の態だったことだろう。私は行く度に彼等の嘆きと怒りを聞いた。だが、この所、劇場の方針も変わってきた。

“夢をつむぐ劇場”、“楽しさをつむいでくれる劇場”、ウィーン・フォルクスオーパーは、“オペレッタ大好き人間”の日本の観客に接し、たまりにたまったオペレッタへの情熱を爆発させてくれるに違いない。待ち遠しい“夢をつむぐ劇場”の6年振りの日本公演である。

演出家・(財)日本オペレッタ協会会長 寺崎裕則

主なキャスト(出演者は当日発表とさせていただきます)

アイゼンシュタイン(仕返しされる人):

アドルフ・ダラボツツァ/ミヒャエル・ロイダー

ロザリンデ(その妻):

エリーザベト・カーレス/レギーナ・シェルグ

アデーレ(彼らのメイド):

ビルギット・シュタインベルガー/ウテ・グフレレール

ファルケ(仕返しする人):

ヴィカス・スラブパート/マルクス・ヴェルバ

オルロフスキー殿下(裕福で暇な貴族):

リンダ・バベルカ

アルフレート(音楽教師/ロザリンデの昔の恋人):

ミヒャエル・クルツ/セバスチャン・ラインターラー

フランク(刑務所長):

ステフェン・レスラー/ヨーゼフ・フテンシュタイナー

プリント(弁護士):

ヘルムート・ヴァルナー/ローランド・ヴィンクラー

イーダ(アデーレの妹):

ウルリケ・バインボルド/クラウディア・ナジ

フロッシュ(刑務所の看守):

ルドルフ・ヴァッサーロフ/ヨーゼフ・フォルストナー



「こうもり」あらすじ

役人侮辱罪で監獄行きの実業家アイゼンシュタインは、友人ファルケに誘われこっそりパーティーに。妻ロザリンデが小間使いアデーレの休暇願いを許して、昔の恋人アルフレートと甘い時を過ごしていると、刑務所長フランクがアイゼンシュタインを収監しに訪問、「人違い」ともいえないロザリンデを横目にアルフレートを連行します。

第2幕は有名なオルロフスキー公爵邸のパーティー会場。しかしなぜかここに、叔母の看病をしているはずのアデーレが女優になりすましています。かと思うとフランスの貴族を名乗るアイゼンシュタインとフランク…、と仮装の面々が勢揃い。なんだか不思議なパーティーです。アイゼンシュタインは、仮面をつけたハンガリーの伯爵夫人を自分の妻だと気づかずに口説き、まもなく浮気の証拠の時計を奪われてしまいます。

明け方、刑務所に出勤したが逮捕してもらえないアイゼンシュタイン。事態を把握した彼は激怒して、やって来た妻の不義を責め立てますが、逆に時計を出されてギャフン/そこにファルケが現れ、「これは昔自分が酔い倒れた時アイゼンシュタインに見捨てられて、“こうもり博士”の嘲笑を受けた仕返しで、『こうもりの復讐』という芝居だ」と告げます。「すべてはジャンバンの為せること」と、一同陽気な合唱のうちに幕となります。

次のことをあらかじめご了承のうえ、チケットをお求め下さいますよう、お願いいたします。

★病氣その他やむを得ない事情により、出演者が変更になる場合がございます。★今回の公演は一部ダブルキャストです。出演者は当日発表いたします。★お買上げいただいたチケットの、キャンセル、変更等はできません。★開演時間に遅れますと、ご入場をお待ちいただき、お立見とさせていただきます。★未就学児童の同伴はご遠慮下さい。なお、ご入場の際には、1人1枚チケットが必要です。★場内での写真撮影・録音・録画、携帯電話の使用等は、固くお断わりいたします。

